

まぼろし
小嶋祥三

尾崎亜美作詞・作曲の『オリビアを聴きながら』の歌詞に「... あなた私の幻を愛したの」というくだりがある。そこで考えるのだが、「幻」は「あなた」と「私」の合作ではないのか。「私」も「あなた」の「幻」を愛していたのではないだろうか。ただ、何が原因か知らないが、「私」はあなたの「幻」に気づき眼を覚ましたのだろう。「あなた」の方は、夜更けに電話するところをみると、まだ「幻」をみていたいようだ。この「あなた」が「私」に幻滅した時にはどう考えるのだろうか。

ドストエフスキーの小説には、人間関係について記憶に残るセリフがでてくる。『悪霊』で脱獄囚のフェージカがピョートル・ヴェルホーヴェンスキーを評して、「...、ピョートルの旦那なんざ、世渡りは楽なもんでございますよ。なにせ人のことを勝手にご自分でこうと決めこまれて、そう決めこんだ相手と暮らしていなさるんだから...」と述べている（江川卓訳、新潮文庫）。しかし、この場合、ピョートルは「事業」を達成するためのコマを必要としただけで、脱獄囚と人間的なつき合いを求めていたわけではない。したがって、コマが不適切な行動をとれば、切り捨てるまでである。事実、フェージカは他殺体で発見されている。ただ、この言葉は他者とウマクいかない状況で、その原因を自分の中に求める時に思い出される。すなわち、わたしがその他者について抱いていたイメージは、わたしが勝手に作り上げたものかもしれない、ということである。

この点に関連して、もう一つ『カラマーズフの兄弟』の中のヒョードル親父のセリフがある。ただし、わたしはこれを大岡昇平が書いた中原中也の評伝『朝の歌』で知った。元の小説でその個所を探したのだが、まだ見つけていない。「私が何故あいつを嫌いになったか」というと、あいつは私に何一つしなかったのに、私があいつに汚い厚かましい事をしたからだ」というセリフである。これはどういう状況なのか。相手から受けた不愉快な経験で相手を嫌いになるのが一般的だ。もともと相手が嫌いだからわざわざ「汚い厚かましい」ことをしたのだろうか。しかし、相手が嫌いならつき合わなければいい。それとも、相手にいろいろとしたが、期待通りの反応がなかったので、自嘲をまじえ、嫌いになったのだろうか。これも上と同じように、相手について作り上げた人物像が、本人とは異なっていた、すなわち、自ら幻を作り上げたので相手を嫌いになったのだろうか。

ヒトは群れたがる動物だ。それは「大審問官」も言っていることだ。人は自分と同じ意見をもつ者に好意をもち、脳内の報酬系は活性化する。これが人が群れる神経基盤だろう。ある研究によると、人は一般に、相手のことがよく分らない状況では、ひとまず、相手を自分と同じように考えるものと捉えるようだ。このようなバイアスが幻のそもそもの始まりなのかもしれない。